

大唾液腺原発腫瘍に関する免疫組織化学的研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-06 キーワード: 作成者: 西村, 俊郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/14869

学位授与番号	医博甲第981号
学位授与年月日	平成3年3月25日
氏名	西村俊郎
学位論文題目	大唾液腺腫瘍に関する免疫組織化学的研究

論文審査委員	主査	教授	古川	仍
	副査	教授	中西	功夫
		教授	橋本	和夫

内容の要旨および審査の結果の要旨

大唾液腺原発腫瘍 107例(多型腺腫60例、腺リンパ腫20例、基底細胞腺腫5例、粘表皮腫瘍3例、腺房細胞腫瘍3例、腺様嚢胞癌10例、腺癌3例、未分化癌3例)と正常腺組織20例を対象として免疫組織化学的検討をケラチン、ビメンチン、デスミンおよび glial fibrillary acidic protein (GFAP) の中間径フィラメントとアクチン、S-100蛋白、分泌成分 (secretory component) についておこなった。正常腺組織においてはケラチン、分泌成分が導管系上皮細胞に陽性で、アクチンは腺房周囲から遠位線条部導管周囲に存在する筋上皮細胞に陽性であった。多型腺腫では、正常腺組織に類似した免疫反応性を示す腺管様構造が存在するが、他にGFAP陽性細胞が存在する点で正常腺組織や他の腫瘍とは異なる免疫反応性を有するものであった。ビメンチン、S-100蛋白およびGFAPの免疫反応性は形態学的に軟骨様部と関連があり、成熟した軟骨様細胞ではGFAPの反応性のみが有意に低下した。多型腺腫に存在する腺管内層細胞と扁平上皮様細胞を除く上皮様細胞の多くがビメンチン、S-100蛋白とGFAP陽性であることから形態学的な間葉系成分、特に軟骨細胞への分化傾向を有していると考えられた。アクチン陽性細胞が腺管様構造と関連して存在している点で多型腺腫、基底細胞腺腫および腺様嚢胞癌に類似性がみられ、これら腫瘍における筋上皮細胞への分化傾向を示すものと考えられた。腺リンパ腫、粘表皮腫、腺房細胞腫瘍、腺癌と未分化癌は筋上皮細胞への分化傾向がみられず筋上皮細胞への分化傾向のない腫瘍と考えられた。腫瘍細胞の筋上皮細胞への分化傾向をS-100蛋白のみで評価するのは不適切で形態学的所見、特に腺管様構造との関係とアクチンなど収縮性蛋白の免疫組織化学的所見と併せて評価するべきと考えられた。

本研究においては、唾液腺多型腺腫の間葉系成分への分化傾向が他の組織型にはみられない独自のものであることが形態学的のみならず免疫組織化学的にも明らかにされた。このことは、唾液腺腫瘍の多様性を理解する上で病理組織学、免疫組織病理学に寄与する論文と評価された。